

■ 神 奈 川 大 学 図 書 館

横浜 〒221-8686 横浜市神奈川区六角橋 3-27-1 TEL.(045)481-5661(代表)
平塚 〒259-1293 平塚市土屋 2 9 4 6 TEL.(0463)59-4111(代表)
<http://www.kanagawa-u.ac.jp/lib/index.html>

神奈川大学図書館はどこへ？

図書館長 鈴木 修 一

図書館長の職に就いたとはいえ、私は図書館についての専門的な知識や技術をもっているわけではなく、その点で図書館行政に携わる資格はないと言われてもそれを甘受しなければならぬが、以下あくまでもひとりの利用者としての立場から、図書館に、とりわけ大学図書館に、期待されるものは何であるかについて述べてみたい。

図書館に期待されるものとは何であろうか。理想的には、利用者が求める情報が内蔵されている図書雑誌がいつでも即座に提供できるような状態にあることだろう。そのためには、豊かで多様な図書雑誌が備えられていて、それらについて熟練した知識をもったライブラリアンがいて、利用者に対応できるような体制が備わっていることだろう。豊かで多様な図書雑誌といったところで、知の在り方は時代社会の変遷にしたがって絶えず変動していくのであるから、それに応えようとするなら、それらを購入収蔵するための莫大なコストを必要とすることになる。さらに購入のための選書をし、利用者の便を計るためのライブラリアンの育成も不可欠になるだろう。

これらの観点から、わが神奈川大学図書館の現状を考えてみると、正直なところあまり恵まれた環境にあるとは言い難いと言わざるを得ないかな、と思う。

以上の点を踏まえつつ、「平成17年度学生生活実態調査報告書（資料編 自由記述）」の中の「図書館への要望」を参照して、利用者は学生、教職員、地域住民と多様であるが、学生を主眼とした利用者の立場からの様々な大学図書館への期待するものを2～3見ていくことにする。

「今のままで十分満足しています」という意見は少数ながらもわけではないが、圧倒的多数は、これでもかこれでもかと言うほど様々な要望が（中にはとんでもないあきれるようなものがない

わけではない）出されている。曰く、「本をもっと充実して増冊して」「検索用のパソコンの増設」「閲覧室の照明をもっと明るく」「洒落たカフェが欲しい」「個人ブースの増設」「開館時間の延長を」「貸し出しをもっと長期間に」「お薦めの本等を教えてほしい」「図書館内にもPC室を」「閲覧室の座席増を」等々挙げていくと際限がないが、これらは利用者の立場から見ると一々私ももっともなことだと思う。

「洒落たカフェが欲しい」というのは唐突なように見えるが私の経験からも外国の図書館などには多く設置されていて、私も在ったらいいと思う。他の多くは先に指摘した、蔵書の豊富さ多様性に関わり、またライブラリアンの能力育成、人員体制、施設等に関わるように思われる。「検索用PCの増設」については、確かに学生数に比して少なすぎるように思われるが、現在ほとんどの学生が自宅でPC利用可の環境にあるであろうし、私もそうだが、図書館に行く前に予め自宅で検索を可能な限り行って行くように私はしているが、一つの解決策にはならないか。「お薦めの本等を教えてほしい」とは正にライブラリアンの問題を浮き彫りにしているのだが、わが図書館の早急に改善すべき点かな、と思われる。他方面でも多々見られるが、ハード面の重視に対してソフト面の比重が軽すぎるという一つの現れにほかならないと言えよう。以上ほんの一端を垣間見たにすぎないが、最後に一つ。

ずばりそれは湘南ひらつかキャンパス図書室に関しての要望。これをいかに解決するかである。「湘南ひらつかキャンパスの図書室をもっと充実させて欲しい」この「充実」とは単に蔵書数だけのことではなく、様々なことを内包させているはずである。

(外国語学部教授・哲学)

国際文化交流学科の学生にすすめる本 『ジャポニスム入門』

鳥越輝昭

外国語学部国際文化交流学科は〈日本文化発信〉〈異文化交流〉〈外国語力〉を教育の三本柱としている。〈外国語力〉の養成を目指す学科は全国至る所にある。〈外国語力〉と〈異文化交流〉とを結びつける学科も少なくない。しかし、〈日本文化発信〉を加える学科はユニークである。

ここでは、そのような国際文化交流学科の学生にぴったりの本を紹介することにしよう。『ジャポニスム入門』である。これは出来の良い手引書である。

第一、研究をはじめるときに必要な視野を与え、要点を教えてくれる。

第二、研究の途上で問題点を整理したいときに参照できる。

第三、さらに研究を進めたい場合のために、適切な推薦図書が載せられている。

一般に何かをする場合には、過去の成功例を学ぶのがよい。今後の〈日本文化発信〉も、成功するとすれば、ほとんどは過去の成功の延長線上に生じるだろう。それに、国際文化交流学科の学生なら、この本に書いてあることは教養としても知っておくべきだろう。

〈ジャポニスム〉は、日本文化が欧米文化に大きな影響を与え、文化再構築の契機ともなった現象を指す。それはおおむね19世紀後半から20世紀初頭にかけてのことだった。すなわち、明治の開国による日本美術工芸品の大量流出から始まって、日本が近代国家としての存在を世界に顕し始めた頃に終わったのである。その間、日本文化の影響は、絵画・工芸・建築・内装・装飾にひろく及び、地域的にも、ヨーロッパ全域と北米とに広がった。

『ジャポニスム入門』は、〈ジャポニスム〉の特徴から説き起こし、日本美術の海外流出問題にふ

れ、フランス・英米から北欧・中欧・ロシアに及んだ日本文化の影響を解説し、建築・音楽・写真・モードへの影響を記す。その後には推薦図書・関連年表・索引を付ける。執筆者は、それぞれの分野の第一人者たちである。

今、海外で〈日本文化発信〉がいちばん顕著にみられるのはアニメーションとファッションかもしれないが、『ジャポニスム入門』を読めば、じつは百年前に日本美術工芸品が受容された場合と重なる面が少なくないことに気付くだろう。細かな点は別として、そもそも、百年前にも日本文化はほとんど視覚美術・工芸の面だけで影響を与えたのだった。

『ジャポニスム入門』にももちろん不十分な面があり、それは自分で補う必要がある。

第一、この本には画家や工芸家などの名前が多数出るが、図版は必要最小限しか載せられていない。だから、図書館所蔵の美術書を見たり、美術館を訪れたり、テレビの美術番組などを見る必要が生じる。

第二、この本は研究への手引きをしてくれるだけである。先へ進んでこそ意味がある。そのためには、興味を持った分野の推薦図書（「参考文献」と書かれている）を読んでみるのがよい。推薦図書には、馬淵明子『ジャポニスム——幻想の日本』、ケヴィン・ニュート『フランク・ロイド・ライトと日本』、深井晃子『ジャポニスム・イン・ファッション』等々、多数の良書が挙げられている。図書館で閲覧してみるとよい。神奈川大学図書館に所蔵されていない本も、取り寄せてもらえることは知っておくとよい。

(外国語学部国際文化交流学科教授・比較文学、文化史)

人間科学部・心理発達コースを希望する学生にすすめる本

人間科学部・心理発達コースの4人の教員がお薦めする本を挙げる。

1. 心理学の基礎的な分野は自然科学的な側面が濃い。専門的な研究者から見れば、それでいいのかも知れないが、一般読者からは「だから何だ」と言われかねない。それはそれらの領域の中の現象の「意味」または「なぜ？」という疑問に対する答えを汲み取ることがむずかしいためではないかと思う。その点で以下に示す2冊の本は、心理学の基礎的な分野でありながら、そうした「意味」を明快に教えてくれる。少し古いが、ぜひお薦めしたい本である。◇R. L. グレゴリー、金子隆芳訳『インテリジェント・アイ—見ることの科学—』（みすず書房、1972）。視覚の（または「見る」という）機能は、基本的に「知覚的な問題解決」であり、まさに「インテリジェント・アイ」であるという主張は説得力がある。◇K. ローレンツ、日高敏隆・久保和彦訳『攻撃—悪の自然誌 I・II』（みすず書房、1970）。この中で著者は攻撃の否定的な側面だけでなく、むしろ積極的な側面について論じる。現代社会の家族を含めたさまざまな事件を考える時のヒントを与えてくれる本である。

[三星宗雄教授]

2. ◇佐治守夫『カウンセラーのくこころ』（みすず書房、1996）。著者は、日本のカウンセリングの草分けの一人である。この本には、マイナーな研究会で行った講演記録が4編、一般的には手に入りにくい小冊子に書いた小論4編等がおさめられている。その意味で、貴重なものと言える。講演という形をとっているが故に、著者は、カウンセリングというものや、カウンセラーとしてのありようというものを、かみくだいて分かりやすく語りかけている。一つ一つの言葉に含蓄があり、臨床経験がないと理解しづらい部分もあるかもしれないが、初心者にも

初心者なりに心に響くものがあると思う。

[横溝亮一助教授]

3. ◇山田無文『十牛図—禅の悟りにいたる十のプロセス』（禅文化研究所）。◇上田閑照『十牛図—自己の現象学』（ちくま学芸文庫）。所謂、入門書・概説書の類ではないが、人生の青年期、中年期、老年期、あるいは、その時々々の境遇においてそれぞれに味わい深く読める書である。十牛図に登場する牛は「真の自己」あるいは「仏性」を表している。人間が牧人として描かれ、人間（牧人）が真の自己（牛）を追い求めて歩むプロセスが十枚の図、即ち、十牛図になっている。十牛図は禅のテキストであるが、人間の生成や形成、若しくは、自分探しという視点から、一般の人にもいろいろと参考になるのではないかと考える。

[大西勝也教授]

4. ◇香山リカ『いまどきの「常識」』（岩波新書）。著者は精神科医である。大学とクリニック、2つの場で見えてくる若者たちの姿、そして急速に変わりつつある世間の「常識」。個人から社会全体にわたるまで、「現実なのだから仕方ない」ですませてしまっていて、それで本当によいのかと私たちに問いかけてくる。今の社会では急速に自己責任論が幅をきかせる。倒産しても悪徳商法に引っかかっても「それはあなたの責任です」で終わることも多い。その一方で、「これは私のせいじゃない、病気が悪いんだ」と問題を病気という形で切り離し、いつまでも社会への「あと一歩」を踏み出せない人が増えている。「かわいそうなのは、私」。しかし他者の苦しみには想像が広がらない。今一度立ち止まって考え直してみる価値は大いにあるだろう。

[古屋喜美代教授]

人間科学部・人間社会コースを希望する学生にすすめる本 —競争から共生へむけて—

星野 澄子

いま日本の子どもたちは、学校で、家庭で、社会で、いじめや体罰、家庭内虐待（身体的・心理的・性的虐待およびネグレクト）、誘拐や殺人事件などの被害にあっています。子どもは次世代社会の大切な担い手であるにもかかわらず……。他方では、働きざかりの男性の自殺が後を断ちません。これらの暴力や悲劇を惹き起こす原因は、今の社会を覆う敵対的競争原理にあるのではないのでしょうか。スポーツや芸術活動など、一定の限られた条件のもとに行われる適度な競争は、個を研くことにも繋がり有益と言えますが、24時間365日苛酷な競争に駆り立てられれば、溜まったストレスのはけ口が弱者へと向かうことは自明の理と言わざるを得ません。そのような日本の現状を直視した書に、①山田昌弘著『希望格差社会』（筑摩書房、2004年）があります。

ではどうしたら、一人ひとりが「個人の尊厳」（individual dignity—日本国憲法24条2項）をもって、「生まれて来てよかった」「生きていてよかった」と実感することができるようになるのでしょうか。悲惨な出来事の後で、長にあたる立場の人がいかに「みなさん、命は大切です。命を大事にしましょう」と唱えたところで言葉は空疎に通り過ぎ、心の琴線に到達しはしません。人間は、生まれた直後から成長過程を経て現在に至るまで、まるごとの存在そのまま（only one—SMAPが歌っているように）の自分が親を始め周りの人たちから、かけがいのない大切なものとして愛され尊重されていることを、からだと心で実感する経験を積んでゆく中ではじめて、自分の命、他の人びとの命、および地球上に生息する生きとし生ける物の命の大切さを知ってゆくのでしょうか。原点に立ち返って人権を考える意味で、②高見澤たか子構成によるベアテ・シロタ・ゴードン（語る人）・村山アツ子（聞く人）共著『ベアテと語る「女性の幸福」と憲法』（晶文社、2006年4月初版）を是非とも読んでほしいと思います。ベアテさんは、山田耕筰とも親交のあったピアニストのレオ・シ

ロタを父に持つ、戦前の人権思想が希薄だった日本に住んだ経験と6カ国語に堪能な語学力を活かし、日本国憲法の人権条項草案を書いた女性であり、本の随所で勇気や希望の湧く、珠玉のような言葉と出会うことができます。

また、46億年をかけて地球に生命が誕生し、人類が出現するまでの地球と生命の壮大な進化の過程を映像で描いた、③DVD『地球大進化』（NHKエンタープライズ、2006年）を観ると、人間もまた他の生命体とともに共存するものであることを再確認できるでしょう。

世界の中で日本を相対的にとらえる眼を養うために、④小松義夫著『地球生活記』（福音館書店、1999年）を推薦します。これは、世界各地の住宅とそこに暮らす人びとの生活を写し取った写真集で、これを読む・観ることによって木の家、土の家、石の家など地球上に様々な暮らしがあることがよく分かります。このような地域による違い、空間による違いに注目するのが地理の世界なのです。[*平井誠先生からの推薦図書]

人間科学部では、横浜から文化を発信するという構想のもとに複数の担当教員による「横浜学」を開講しています。そこで、この授業とは直接関係ありませんが、開港後間もない横浜の馬車道を舞台に展開する戯曲を紹介しましょう。それは、⑤押川昌一著『馬車道の女』（門土社総合出版、1991年）で、武士になったキリスト者を主人公に真摯な生き方や人間関係を追求しており、山本学・佐藤オリエ主演で上演された作品でもあります。

人間社会コースには、社会学（横倉節夫・笠間千浪）、文化人類学（小馬徹）、国際関係論〔アジア研究〕（永野善子）、社会心理学（寺沢正晴）、環境科学（松本安生）、人文地理学（八久保厚志・平井誠）、法社会学（星野）の9名が所属しています。それぞれの教員の専門書および研究論文についても、検索し読んでみることをお勧めしたいと思います。

（人間科学部助教授・ジェンダー論）

人間科学部・スポーツ健康コースを希望する学生にすすめる本 『スポーツ選手のためのキャリアプランニング』

大 後 栄 治

「スポーツ選手をやめた後どうします?」。何ともスポーツ選手にとってはインパクトの強い言葉である。これは、本書の帯紙(本に巻いてあるインフォメーション)に記されている。競技にのめり込めば込むほど、そしてそのレベルが高くなればなるほど、何かの自己犠牲を強いられる。パフォーマンスの向上のために、全神経を集中し没頭する。それ以外の余計なことは考えないようにする。それが多くのアスリートの現状であろう。

そして、「訳者まえがき」を開くといきなりこうだ!「もしもメダルが取れたら死んでもいい」。これも激しい。しかし、オリンピックのメダルレベルまで行かなくとも、スポーツ選手であれば勝利を手中に収めたい、結果を導きたいと日々真剣に考え、取り組んでいると思う。だから、競技生活を終えた後のことなどはあまり考えていない。いや、考えないようにしているのかもしれない。

この「まえがき」を綴ったのは翻訳者のお一人でもある田中ウルヴェエ京さんである。彼女はソウルオリンピックシンクロナイズドスイミングの銅メダリストである。至福の時であったようだ。そして引退。「自分は大きな功績を果たしたのだ」と幸福感に満ちあふれていた。しかし、時が経つにつれて、ふと気づいたようだ。「これからの人

生って、なんて長いんだろう…」と。「オリンピックのメダル。確かにそれは素晴らしい。けれど人生にとって、それは通過点にすぎない。そのことを理解していなかった」と回想している。

その後アメリカでスポーツ心理学を学ぶ。そのときのテキストが本書である。競技者として集中しながらも考えておかなければならないこと、心得ておかなければならないことがある。そのことを伝えたかったのである。

重野弘三郎氏。元Jリーガー。現在はJリーグキャリアサポートセンター専任スタッフ。もう一人の翻訳者である彼も、競技引退後、葛藤と路頭に迷う経験を持つ。引退後スポーツ社会学を学ぶ。田中氏と共感する部分が多く、本書の翻訳に携わる。

本書の特徴に“キャリア・トランジション”というキーワードがある。乗り換え、分岐点という意味であろうか。本書はそれぞれの時期における、トランジションの考え方や事例を紹介しており、特に大学生である諸君らには、「大学時代のトランジション」が参考になると思われる。競技生活と将来の方向性をどの様に考えていくべきか。付属のワークシートを書き込みながら、問題点をを一つ一つ整理していける構成になっている。

(人間科学部教授・健康科学とスポーツ)

<推薦図書一覧>

書名	著者	出版社	請求記号
ジャボニスム入門	ジャボニスム学会編	思文閣出版	B702-234 702.06-13
インテリジェント・アイ	RL.グレゴリー著、金子隆芳訳	みすず書房	B141-44
攻撃:悪の自然誌 1・2	K.ローレンツ著、日高敏隆・久保和彦訳	みすず書房	B481-1-20、B481-2-20
カウンセラーの<こころ>	佐治守夫著	みすず書房	B146-223 146.8-36
十牛図:禅の悟りにいたる十のプロセス	山田無文著	禅文化研究所	B188-731.B
十牛図	上田閑照・柳田聖山著	筑摩書房	B081-U.2.1-55
いまどきの「常識」	香山リカ著	岩波書店	B081-2969-39 081- 95-969
希望格差社会:「負け組」の絶望感が日本を引き裂く	山田昌弘著	筑摩書房	B360-31
ベアテと語る「女性の幸福」と憲法	ベアテ・シロタ・ゴードン語り、村山アツ子聞き手	晶文社	B323.1-793
[映像資料] 地球大進化:46億年・人類への旅	NHKエンタープライズ21	NHKソフトウェア	F2422-1~6
地球生活記:世界ぐるりと家めぐり	小松義夫著	福音館書店	B527-250
馬車道の女	押川昌一著	門土社総合出版	B912.6-156
スポーツ選手のためのキャリアプランニング	A・プティバ他著、田中ウルヴェエ京・重野弘三郎訳	大修館書店	B780-99

リープクネヒト版『共産党宣言』1872年

Das kommunistische Manifest / [Karl Mark, Friedrich Engels].--Leipzig : Thiele für Verlag der Expedition des „Volksstaat“, 1872.--27p.;18 cm “Neue Ausgabe mit einem Vorwort der Verfasser.”

K. マルクスとF. エンゲルスの著作『共産党宣言』Manifest der Kommunistische Partei は、亡命ドイツ人を中心とした国際的労働者組織共産主義者同盟の理論的・実践的な綱領かつ世界最初の共産主義者の公然たる綱領的文書あって、1848年1月にマルクスが執筆し2月にロンドンで刊行された。冒頭の「ヨーロッパに怪物が現れた。共産主義という怪物が」に始まり「万国のプロレタリア団結せよ」の結びは広く世界に知られることになったが、初めは、マルクスとエンゲルス両執筆者の署名はなかった。後にレーニンは、「1848年に出版されたマルクスとエンゲルスの『共産党宣言』はすでに、マルクスの学説のまとまった、体系的で、今日まで比類のない叙述」を提供していると述べている（「カール・マルクスの学説の歴史的運命」邦訳『レーニン全集第18巻』大月書店627頁）。日本で確認されている『共産党宣言』には、経済学者榎田民蔵がベルリンのドイツ社会民主党文庫から1921

年に譲受けたものがあって、その扉に1848年の印刷年があったから初版本の一種と考えられていた。しかし、それはマルクスと親しい出版業者 R. ヒルシフェルトが1859年から1865年にかけて〈歴史的な文書〉として初版本を忠実に再現し刊行したことが後に検証され、しかも世界で現存わずか8冊の稀覯本・ヒルシフェルト版『共産党宣言』として認められている。本学所蔵のリープクネヒト版『共産党宣言』の刊行は、1867年にハンブルクで出版された『資本論』第1巻の理論をドイツで広めていたドイツ社会民主労働党の創立者の一人、W. リープクネヒトが1869年頃からマルクスに熱心に請うて実現し、本書によって自党の鼓舞、ドイツ労働者運動の発展を目論んだ。本書には、マルクスとエンゲルスの「1872年6月24日ロンドンにて」の〈序言〉が添えられているが、後述するように、それがために本書はその独自性を保つことができた。と言うのは、3カ月前の3月11日から、ライプツィヒでは〈パリ・コミューン〉を公然と支持し、アルザス＝ロレーヌの併合を反対したリープクネヒト等をドイツ政府は大逆罪で告訴し、裁判が行われていたからである。この間の経緯については、橋本直樹『『共産党宣言』1872年ドイツ語版の刊行経緯』（『経済学論集』鹿児島大学経済学会・1993年第39号57頁以下）の先駆的研究があって、本書1872年ドイツ語版は、『ライプツィヒ大逆裁判』報告での第3分冊『宣言』部分の別刷であることが明らかになった。つまり、マルクスとエンゲルスの〈序言〉がなければ、本書は裁判での陳述の『宣言』資料の一部でしかなく、〈序言〉が添えられて辛うじて版の形態を保てたとも言える。刊行部数は、100部から数百程度、現存の数は10数部で、これからの検証によると思われるが、1872年以降、『共産党宣言』が新たに出版される時には、本書が底本となり表題が **Das kommunistische Manifest** となった。本書の〈序言〉で、マルクスが初版から24年間経過し、時代状況がいかに変容しても自分たちの考えが全体としては正しかったと述べていることを、世紀を越えた現今の我々はいかに受止めるべきであろうか。

(情報サービス課 吉田 隆)



リープクネヒト版『共産党宣言』1872年

横浜キャンパス図書館展示コーナー

戦後教育改革と神奈川大学

■展示期間：9月12日（火）～11月30日（木）

■企画・展示：神奈川大学資料編纂室

資料編纂室では、昨年(2005年)、戦後60年の節目を迎えるにあたり「旧制横浜専門学校―戦時下の学生―」と題した展示を行った。神奈川大学の歴史は1928年に設立した横浜学院、翌1929年に改組した横浜専門学校に始まる。その歩みを振り返ると、横浜専門学校設置の二年後には満州事変が勃発して戦争と無関係でないことが分かる。展示では、軍事教練・学徒出陣・学徒勤労動員といった戦時下の学生の様相を中心に往事の実態を紹介した。

さて、このたび開催する展示は、戦後改革期に焦点を当て、神奈川大学誕生前後の動向を学校側・学生・世相などの観点から見るものである。戦後改革の要点の一つに教育が挙げられていたことは言うまでもない。「戦時下の学生」で取り上げた光景や、軍国主義の惨禍を二度と繰り返さないために教育の民主化は急務であった。なお、こうした教育改革がGHQの指示によって進められたことは事実であるが、この面ばかりを強調するのは正しくない。敗戦直後の1945年11月3日に発表され、学校再建の道を示した「教育刷新に関する所見」（展示予定）という資料がある。横浜専門学校の若手教授8名によって表明されたこの資料が述べるように、戦後教育改革（民主主義的教育）の実現には、「外部からの」至上命令として行なわれるのではなく、戦争を遂行した勢力を招きその存在を黙認した国民間の「封建的事大思想」を除くという「内面的理由」の認識がなければならなかった。さらに言えば、「教育の民主主義化を、単に外からの命令に依って已むを得ず行おうと言うのではなく、我々自身の問題として自発的且積極的に実施せねばならぬ」のであった。神奈川大学の戦後は、言わば教育の責任に気づいたところから出発する。展示を通して神奈川大学の出発点を確認していただければ幸いである。

―外国語学部国際文化交流学科開設記念―

神奈川大学図書館所蔵貴重書に見る 『日米文化交渉史 横浜・神奈川』展を開催

今年の秋と来年の冬に、有隣堂イセザキ町本店ギャラリーと紀伊國屋書店新宿本店ギャラリーにおいて、外国語学部国際文化交流学科開設記念『日米文化交渉史 横浜・神奈川』展を開催します。17世紀以降、日欧交渉史は、日本の歴史を見る重要な視点となっています。展示では、本学図書館で所蔵するモンタヌス、ケンペル、アンベール等の日本研究を通して、日本と欧米との政治的、社会的、文化的交渉史を、横浜・神奈川の開港期を中心に紹介します。

【主な展示資料】

- ◇アルノルドウス・モンタヌス『オランダ東インド会社遣日使節紀行』（1669年）
- ◇エンゲルベルト・ケンペル『日本誌』（1719年）
- ◇エメエ・アンベール『日本幕末図絵』（1870年）
- ◇フレドリック・ディキンズ『万葉集』（1906年）
- ◇『学術・芸術総合百科事典』（1812年）

【場所・会期】

- ① 横浜イセザキ町・有隣堂本店書籍館地階「有隣堂ギャラリー」
2006年10月3日(火)～10月9日(月)
- ② 紀伊國屋書店新宿本店 ギャラリー
2007年2月1日(木)～2月7日(水)



横浜キャンパス図書館アスベスト除去工事に伴う 臨時休館及び利用サービスの変更について

横浜キャンパス図書館アスベスト除去工事が2006年8月4日(金)～2006年9月8日(金)の日程で実施されることとなり、工事期間中は全館閉鎖の措置がとられ、工事関係者以外立入りができなくなります。これに伴い、下記のとおり臨時休館とし利用サービスを変更いたしますので皆様のご理解とご協力をお願いいたします。

なお、図書館内部事務業務(目録、整理、諸事務処理等)は、仮事務所を設置し行います。

臨時休館期間

2006年8月3日(木)～9月11日(月)
(仮事務所 23号館201、203)

利用サービスの変更

1. 貸出期間

利用者	貸出開始日	貸出返却期限日
学部学生	7月14日(金)	9月25日(月)
科目等履修生、単位互換生等	7月14日(金)	9月25日(月)
一般公開 B・C 会員等	7月14日(金)	9月25日(月)
大学院生・研究生(6月20日以降の貸出は通常貸出期間の3か月)	5月1日(月)～ 6月20日(火)	9月20日(水)
教職員・研究員(通常貸出期間5か月)	3月～4月上旬	9月30日(土)

- * 学部学生・科目等履修生等の長期貸出は通常どおりです。
- * 教職員・研究員の方で、既に臨時休館中に返却期間が設定されている場合は、上記期限日までに返却いただくことによって、延滞を解除いたします。

2. I L L文献複写、現物貸借依頼等(他機関からの取り寄せ)

取扱場所：23号館203教室

受付時間：午前9時～午後4時(12:00～13:00は除く)

詳細は図書館ホームページをご覧ください。

3. その他参考業務

他大学図書館等への紹介状の発行、データベースの利用方法についての説明等一部仮事務所
で可能な参考業務は、継続します。(取扱場所・受付時間は上記2と同じです。)

書架から

40年ほど前に「華氏451」というSF映画が放映された。思想統制のため、本を読むこと、持つことが禁止され、見つかると本はその場で焼却される。紙(本)が燃え出す温度が華氏451度(摂氏約233度)なのである。国民の耳には「海の貝」と呼ばれる小型ラジオ受信器がきつくはめ込まれていて、絶えず情報が流されている。家では巨大なスクリーンでテレビを見る。そして、そこで描かれた未来社会がやってきた。人々はヘッドホンを耳に当て、携帯電話やインターネットを駆使する。今IT機器は確かに知識や情報を得る手段、コミュニケーションの手段として欠かせない。まさかコンピュータの発達が書物を捨て去ることに繋がないだろうが、しかし我々はもう一度<活字文化>について考えてみなければいけないような気がする。夏休みである。少しの間情報の洪水から離れて、木陰で本の頁を繰るのも良いのではないだろうか。インクの匂いがする。風の音が聞こえる。(Y)